

2023年2月12日（顕現後第6主日、A年）

牧師メッセージ

「神の思いをそのまま受け取る」

（マタイによる福音書5:21-24, 27-30, 33-37）

司祭ヨセフ太田信三

主イエスは「偽りの誓いを立ててはならない」と言います。「誓い」は、誓う者同士が、完全な信頼関係にあるときには不要だからです。たとえば、「渋谷で5時に待ち合わせ」をするとき、お互いに信頼関係ができていれば、それだけで、約束は成立します。しかし、片方がいつも遅れてくる人だったらどうでしょう。そこに信頼関係はありませんから、約束してもらいたい側は、何らかの保証を差し出し、誓いを立てなければ約束をしてもらうことはできません。つまり、「誓い」が必要な人間関係には、すでに何らかの亀裂が生じている、ということです。この亀裂は、その人間の口から出る言葉が誠実とは言えないから生じるものです。まして誓う際に神を引き合いに出すなどとは、さもありなん、、、。神を利用して結局は、自分自身は不誠実なままで、しかし自分の思い通りにしたいと考えていることに他なりません。ゆえに、主イエスは「一切誓いを立ててはならない」と教えます。

主イエスがわたしたちのことを導こうとしているのは、もはや誓う必要のない、信頼に満ちた世界です。それは、「殺すな」「姦淫するな」という掟に込められた神の思いにわたしたちが立ち返るときに実現します。そこに込められた神の思いとは、相手の命も、自分の命も神にとってかけがえのない大切なものなのだ、という思いです。そしてさらに、それほどに大切な命なのだから、あなた方は互いの命を表面的ではなく、心から大切にしてください、という思いです。誓う必要のない世界とは、この心が互いの関係の基礎にあってこそ実現するのです。

十戒には「殺すな（出エジプト20:13、申命記5:18）」のみしか記されていませんが、昔の人々はこれに「人を殺した者は裁きを受ける」という解釈を加えました。さらに、この掟が適用される犯罪行為は、凶器を使った殺人とされました。このように掟に限定を設けることで、人は容易に自分を正当化することができるようになってしまいました。人の言葉が加えられることで、その掟に込められた神の思いは置き去りにされてしまったのです。それゆえ主イエスは、わたしたちが口にするのは「然り」と「否」のみで良いと言われます。「偽りの誓い」同様、人の口から出る言葉は、神と人ともに不誠実なものであることが往々にしてあるからです。ですから、まずは何より、人のいのちに無関心ではいられない神の思いをそのまま受け取りたいと思います。そして、心から神と他者ともに誠実に生きることができるようにと願います。